

# MACC<sup>マツク</sup>通信

Monozukuri Arakawa City Cluster

第19号

2011年12月22日発行

荒川区が進める「MACCプロジェクト」は、荒川区の特徴である多彩な産業集積を活かした、区内企業同士の顔の見えるネットワークの形成を推進することで、荒川区の産業振興（商品開発や販路拡大など）を図ろうとするものです。「MACC通信」は、この「MACCプロジェクト」に関わるホットな情報をお届けしていきます。

今回は、「第6回MACCプロジェクト・フォーラム」（11月17日）と「平成23年度産学交流会（都産技研新本部見学ツアー）」（12月6日）についてのご報告のほか平成24年2月に開催されます「グローバルビジネス研究会キックオフセミナー」のご案内をお届けします。

## 第6回MACCプロジェクト・フォーラムを開催

### つかもう！新製品開発のコツ ～MACCと一緒にステージアップ！～

MACC（荒川区モノづくりクラスター）プロジェクトを運営する荒川区は、11月17日サンパール荒川で、「第6回MACCプロジェクト・フォーラム」を開催しました。テーマは、『つかもう！新製品開発のコツ～MACCと一緒にステージアップ！』。これまでのMACCプロジェクトの活動経過を振り返りながら、顔の見えるネットワークの構築・活用を通じた新製品開発を検討し、区内産業のさらなる活性化への道を探りました。フォーラムには、MACC関連の団体・企業のほか、他県の大学・団体・企業を含め約50人が参加しました。

#### 重要性増す！中小企業を元気づける産業振興

冒頭、東京23区の特別区長会の会長でもある西川太一郎荒川区長があいさつをし、「厳しい経済・産業環境ではあるが、荒川にモノづくりクラスターを形成し、産業振興を加速したいという思いを強くしている。山形大学工学部や中小企業基盤整備機構などとの連携協力も着々と実績をあげているが、さらに苦境打開への取り組みを強化する必要がある。特別区長会でも中小企業対策の勉強会をしたり、区ごとの中小企業データの整備を行ったりするほか、税制改正についても議論し始めている。荒川区としても中小企業を元気づける産業振興に一段と力を入れ、MACCプロジェクトの新たな事業展開に期待し、支援していく」と述べました。



あいさつをする西川区長

#### ㈱ストロング、松田金型工業㈱に感謝状を贈呈

続いて、MACCプロジェクトの事業者表彰として、新製品・新事業開発に積極的に取り組み、大きな成果を残した㈱ストロング（代表取締役：平岩隆宏氏）と、松田金型工業㈱（代表取締役：松田正雄氏）に西川太一郎区長から感謝状が贈られました。

◆㈱ストロングは創業75周年の老舗スリッパメーカー。業界における知名度は高く、リーディングカンパニーです。平成22年7月に代表取締役に就任した

平岩隆宏氏は、MACCプロジェクトの分科会「あすめし会」に参加して、“明日の飯の種”を生む活動に積極的に取り組み、その経験を自社経営に活かして、「家をきれいにスリッパ」をコンセプトに新製品「はがせ



㈱ストロング  
代表取締役 平岩隆宏氏(左)  
松田金型工業(株)  
代表取締役 松田正雄氏(右)

る！バーバパパお掃除スリッパ」を開発。また、東日本大震災の際には被災地にスリッパ3000足を援助するなど、社会貢献にも熱心に取り組んでいます。

◆松田金型工業(株)は創業76年を刻むプラスチック金型の老舗企業。

一体成形法など他社にない金型づくりで業界での存在感を示しています。代表取締役の松田正雄氏はMACCプロジェクトの分科会「健康福祉ビジネス研究会」に参加して積極的に活動し、産学官ネットワークを活用して、首都大学東京の伊藤准教授との連携を図り、ヒトの感覚を刺激しながら発達を促す遊具「トゥインクリンク」を開発。また、小型化・消音化・省電力化に有効なファンを製造する金型に関して、経済産業省の「平成23年度戦略基盤技術高度化支援事業(通称：サポイン事業)」に採択されるなど、新製品開発面で顕著な成果をあげています。

## ■基調講演

テーマ：つなごう！モノづくりの輪！

～新しいモノは連携から生まれる～

講師：国立大学法人岩手大学地域連携推進センター  
産学官連携コーディネーター 佐藤利雄氏

岩手大学の産学官連携は、地域課題の解決と産業振興という2本柱で取り組んでいます。どちらも岩手大学の知的財産を地域や産業界に還元しながら、連携した事業を展開し、地域と産業の活性化の推進や、次の時代につながる創造的サイクルの構築を目指しています。

地域課題の解決では、牛馬等の育成、土壌改良、北上川清流化対策、リモートセンシング技術を利用した漁場情報の提供などの成果をあげています。産業振興では、盛岡高等農林学校の村松博士による納豆業者に対する指導、岩手大学工学部の中村・森岡博士のトリアジンチオール産業応用、岩手大学農学部西澤博士による雑穀の機能性に着目した食品の開発をはじめ、新たなテーマの取り組みが次々と進行しています。



岩手大学地域連携推進センター  
産学官連携コーディネーター  
佐藤 利雄氏

## 居酒屋で例会を開く交流組織

産学官連携で象徴的なのは、「岩手ネットワークシステム(INS)」という組織です。このINSは岩手県内の科学技術及び研究開発に関わる産学官民の交流の場として、平成4年3月に発足しました。県内の科学技術及び研究開発に関わる人と情報の交流・活用を活発化し、技術革新と産業振興を図ることを目的として、事務局を岩手大学の工学部に置き、地域連携推進センターと連携し活動しています。

特徴的な点は、メンバーそれぞれが個人資格で参加していることです。現在の会員は1145人という大所帯になり、産業界から571人、学界から233人、官界から341人という内訳です。例会は、毎回、居酒屋で開き、ざっくばらんな雰囲気の中で、意見交換、情報交流しているのもユニークです。INSには現在、44の研究会があり、それぞれの研究会が共同研究テーマを掲げて活動する一方、INS全体として公開講演会・講座、研究成果発表・展示会、産学官交流会、企業講座などを開き、両者をうまく機能させることで、研究活動を検証し、具体的な成果を得られるようにしています。

44の研究会は環境、宇宙、エネルギー、電子、機械、材料、医療などの科学技術の分野や、住まい環境、地場産業、街づくり、地域とスポーツなど地域関連分野、雇用、ものづくり、知的財産活用、国際産業交流など多岐にわたっています。

私自身は複数の研究会に属して勉強しており、その中に、花巻地区の若手経営者や後継者を中心にした「起業化研究会」というグループがあります。平成16年度に発足し、現在90人を超える人が参加して活動していますが、アントレプレナー(起業家)の指導で産学官連携を進め、「受託企業からメーカーへの転身」「後継者への事業継承」に取り組み、その目標を達成する経営者も出始めています。

## モデル事例を紹介

成果をあげた事例のひとつが、花巻地域の企業である伊藤工作所。乳牛の排泄物を清掃する装置「ダングクリーナー」を開発し、自社製品を持つメーカーに転身しました。ここに至るまでには、岩手県工業技術センターの技術指導、拓殖大学工学部工業デザイン学科との共同研究、(株)新興製作所や(株)ヒラガ、(株)サトウ精機とのパートナーシップといった連携が成果を生む大きな力になっています。平成21年

には経済産業省選定の「2009年元気なモノづくり中小企業300社」に選ばれ、いまではオリオン機械㈱と販売提携して関東、九州地区でも販売するなど、畜産業界に一石を投じています。

もうひとつの事例は、同じく花巻地域の企業である㈱伸和光機の事業展開です。従来から中学生の職場体験学習を受け入れていましたが、リーマンショックで本業が苦境に立った時、岩手大学工学部主催のマイスター育成講座を受講して、新商品開発のヒントをつかみ、小中学生向けの実習用教材を開発しました。現在、理科の学習教材「組み込みシステムキットシリーズ」（定価2500円）としてヒット商品に成長し、同社自体も教材メーカーとして知名度を上げ、INSの中核的存在ともなっています。

### 5年間で成果を上げる！

INSの運営で基本にしていることは、事業化までのステップです。その際の考え方は……、

- ・1年目は、共同研究を開始し、社員の係わりをどのようにするかを考える。
- ・2年目は、補助金などを検討し、知的財産について考える。
- ・3年目は、展示会などへの出展を検討する。
- ・4年目は、販売ルートを確立して、量産体制を整える。
- ・5年目は、マスコミなどへ積極的にアピールし、販売を開始する。

さらに、どのような場面でも多くの人と交流し、いろいろな事業展開のヒントを得ることが大切で、情報源との直接のコミュニケーションを怠ってはいけないということです。

今後は、IM(インキュベーションマネージャー)の全国ネットワークを活用し、拠点を東京、関西、札幌、仙台などに設けて、ネットワークを広域化し、新たな活動体制を構築したいと考えています。

#### 佐藤氏のプロフィール

昭和31年花巻市生まれ。産学官連携コーディネーター界の草分け的存在。内閣府「地域産業おこしに燃える人」への選定、「JANBO Awards 2005 ビジネス・インキュベーション大賞」の受賞、中小企業庁「地域中小企業サポーター」への任命など、現場での活動が高く評価されている。

## ■パネルディスカッション

テーマ：なぜ“あすめし会”で新しいアイデアが創出されるのか～付加価値の創出を目指して～

パネリスト：

- ・国立大学法人岩手大学地域連携推進センター 産学官連携コーディネーター 佐藤利雄氏
- ・株式会社タカハシ 代表取締役 高橋弘明氏
- ・三宏印刷株式会社 清野順也氏
- ・株式会社トネ製作所 営業技術部 利根祐樹氏
- ・MACCシニアコーディネーター 豊泉光男氏

司会：MACCコーディネーター 牛山博文氏

**司会** 最初に、MACCプロジェクトの分科会「あすめし会」を豊泉より(以下敬称略)紹介します。

**豊泉** 「あすめし会」は4年前にスタートしました。「仕事が欲しい」という区内企業の声を背景に、若手経営者・後継者が集まり、“明日の飯の種”を生み出す目的で活動を開始した組織です。当初は、新製品・新事業開発を進めようにも、ヒトもない、カネもないという状況でした。そこで、できることはなんでもやろうと切り替えて、経営課題の解決に取り組みました。まず、ヒトの問題については、社内人材の育成と社外ネットワークの活用を目指しました。次に、それぞれの企業の強みを発掘し、自らの技術や特徴点を磨くことに努めました。カネの問題は助成金の活用を研究し、申請書づくりから勉強しました。そして、情報を得るために産学連携や産産連携を積極的に進めました。最後に、デザイン分野やマーケティング、流通分野などモノづくり企業を支援するサービス産業との事業連携を図りました。こうした取り組みを一つ一つこなしながら、新製品・新商品開発の土壌をつくり、製品開発の風土を盛り上げてきたという経緯です。



左から司会の牛山氏、パネリストの豊泉氏、佐藤氏

いまに至って、「ナイナイづくしの一手は、泥臭く、地道な一歩から」という思いを強くし、具体的な成果を上げるポイントは「成長モデルをつくる。多様なネットワークを共有し、有効に活用する。IMとのパートナーシップ」にあると感じています。

### 柔軟さがアイデアを生む

**司会** 「あすめし会」に参加したことで、モチベーションや考え方はどう変わりましたか。

**利根** 当社は精密板金加工メーカーです。創業45年で、私は3代目です。最近では電子技術を取り込んで、パチンコ・パチスロの機構部分を製作するなど成長してきましたが、請負の仕事が主体で、製品開発には積極的に取り組んできませんでした。私自身も自社製品の開発に興味は薄かったが、「あすめし会」に参加して、製品開発に意欲をもって取り組むようになり、新たなアイデアが浮かびやすくなったという実感があります。

**清野** 当社は社名の通りの印刷業で、私は3代目です。以前から新商品の開発には興味を持っていたものの、一歩抜け出せない実態がありました。「あすめし会」に参加して、実際に自社製品を開発している企業と知り合うことで、考え方が柔軟になって、タガを外して思考できるようになりました。

**高橋** 当社は緩衝材などの製造業ですが、目下事業転換を図りつつあるところです。「あすめし会」に参加して、同じような境遇の仲間と相談し、議論し、悩み事を共有できるようになりました。問題解決に向け、切磋琢磨する雰囲気を実感しています。

### 自社の経営を見直す好機

**司会** 考え方を変化させ、新しいアイデアを創出するには、どのような取り組みが有効ですか。

**利根** 私自身が精密加工技術をもとに作ったもので、金属製コブラというレプリカがあります。蛇のように柔軟に動く置物で、遊び心で製作し、商品化の見込みもなかったのですが、MACCメンバーから売れる商品になると言われて、商品価値があると気付かされました。ごく簡単なことでも広く展開して考えることが大切だと感じています。

**清野** 印刷業にとって新商品開発の原点は「紙」。その紙を素材にした商品はないかと、1日1品、アイデアをひねり出す取り組みを数カ月休まず続けました。思いついたことにどんどん挑戦し、試行錯誤を

重ね、その中からめぼしいものも生まれ、苦労が実りそうな状況になってきたところです。

**高橋** 人前で発言・プレゼンすることも有効だと思います。絵空事であっても情報収集が必要になり、自分自身を見つめ直す機会ともなります。意見を述べることで責任・義務が生じ、目標設定ができます。私自身、自社の経営をサービス業に近いと考え直し、熟考するようになりました。



左からパネリストの高橋氏、清野氏、利根氏

### 進化のカギは「ネットワークの活用」

**司会** MACCプロジェクトは、「顔の見えるネットワーク」の構築を基本に据えています。そのネットワークをどう活用していますか。

**利根** 私は「あすめし会」メンバーの中で一番若く、社内でも一兵卒ですが、異業種の経営者と同じ時間を共有することで、知らなかった世界や考え方が勉強でき、自分自身の成長につながっていると感じています。MACCコーディネーターの紹介で区の補助事業や企業診断を活用し、経営革新に役立てることもできました。また、山形大学の指導を受けたりすることが、社内に新風を吹き込んでいます。

**清野** 「あすめし会」の活動を通じて、他業種への興味が増し、多様な話題を積極的に聞くようになりました。また、展示会への出展経験がない企業も少なくないですが、顔の見える関係になると、協力関係が芽生え、展示会用のパネル・チラシ・名刺など印刷物の作成を受けることもあります。MACCコーディネーターの応援も細やかで、当社に関連した新聞記事を届けていただいた時は、頭が下がりました。

**高橋** 人的なネットワークを活用することが極めて有効だと痛感しています。問題を解決するためには、何らかの決断が必要になりますが、「あすめし会」で時間をかけて議論することで、多くの視点や問題点が指摘され、解決への道が見えてくるという形になってきたように思います。

**佐藤** 中小企業の場合、自社だけで問題を解決して、経営刷新を図り、新製品開発を進めるというのは無理。外部の資源を有効に活用することが欠かせません。その外部資源を探す際は、IMを活用するのが有効です。地域との連携、企業との連携を進めるにも、IMがいるかないかが重要なポイントになると思っています。

### 動きやすい運営がミソ

**司会** 今後さらに、「あすめし会」の活動を活発化し、成果を上げていくための提言・要望をお聞きかせください。

**佐藤** 一般的に、グループ活動は構成員が若ければ活力があるとは限りません。向上心の旺盛な若い世代からも、経験豊かな高年層からも評価される組織が理想です。仮説ですが「15歳理論」というものを私の中に持っています。15歳くらいの年齢幅のあるグループを形成して刺激し合う関係をつくるのが良いです。それから、経営者同士を無理やりくっつけるのではなく、それぞれのメンバーが動きやすいようにすることも大切です。そして、グループに参加することが楽しくなければ、会合に来なくなるという点にも留意すべきです。

**利根** お互いの会社のことをもっと深く知るようになれば、つながりはさらに深まると思います。自社の経営にとってプラスになることはどんどん取り入れていくという貪欲な姿勢で臨んでいきます。希望として、「商談会」などの企画があるといいですね。

**清野** 皆さんが前を向いて、積極的に参加し、その活動や成果を外部に積極的にアピールすることが大切だと感じています。事業運営を拡充する一つとして、プロダクトサービス業などがメンバーに入ってくると、より広がりが出てくると思います。

**高橋** さらに相互理解を望んでいます。メンバー企業を中心に相互に訪問し合い、良い点・悪い点を指摘し合うなど、もう一歩踏み込んだ取り組みを願っています。そうすれば、無理なくWin-Winの体制が築けるとと思っています。

### 地方との連携を広げよう！

**司会** 最後に、MACCの事業展開を含めて、感想なり、まとめの話しをお聞かせください。

**佐藤** 地方圏からみると、首都圏の産業界は恵まれ

ていると思うことが多いです。いろいろな補助制度があり、補助金が多額であることもその1つです。それらの施策をうまく活用することと合わせて、地方との連携にも一段の目を向けてほしいですね。例えば、地方から研究開発型の施設を誘致して研究開発の幅を広げ、複合的・多角的に展開するようにしたいものです。空き工場のリニューアル化なども検討課題だと思うし、地方と都市の接点やメリットを再構築したいと願っています。

**豊泉** MACCコーディネーターとして重視していることは、新製品・新事業開発の相談にとどまることなく、経営全般にわたってサポートすることです。いわゆる、ワンストップのバックアップが役割だと思っています。企業と大学・高専との橋渡しは勿論のこと、事業展開を深掘りする際に必要な技術やデザインなどの専門家の紹介、販路拡大・マーケティングのお手伝い、連携・共同事業の仕掛けづくりなど、思いつくことを行動に移して、形にしていくように努めています。

目下、スカイツリー関連の商品を開発して共同受注を図る計画が進行中です。来年早々にはモノづくり企業を支援する新たな分科会も発足する予定です。

少しでもアイデアがあれば相談してください。MACCプロジェクトは本音で話せる組織、ビジネスベースの組織として事業展開していきます。

### 【交流会】

全体会議の終了後、交流会が開催され、講師、パネリストをはじめ、フォーラムに参加した企業経営者や支援機関、大学を含む産学官の方々がそれぞれ歓談しました。



交流会の様子

# 平成23年度産学交流会

## 都立産業技術研究センター 「新本部見学ツアー」を実施しました

中小企業のモノづくりを総合的に支援する東京都立産業技術研究センター（都産技研）の新本部を訪ねる見学ツアーが12月6日に実施されました。

見学ツアーには区内企業の経営者・幹部ら40人余が参加し、最新の研究・実験設備と専門技術者を配備した「新技術・新製品開発の支援体制」を実地で見聞して、参加者それぞれが新本部の施設活用への関心を強くしました。



見学ツアーを歓迎する案内映像

### 技術支援体制を整え、中小企業の活用を促す新本部

#### ■最新設備を駆使したサポートが売り

東京都立産業技術研究センター（都産技研）は、都内の中小企業の技術支援拠点として、江東区青海に新本部を開設し、10月3日から本格的に業務を開始しました。

新本部は、5階建ての広いスペースの施設となっています。ここに西が丘本部（北区）と駒沢支所（世田谷区）の機能を統合し、最新の試験・研究設備と技術スタッフ陣（約260人）を結集して、既存事業を拡充するとともに、新規事業にも取り組む体制を整えました。

都産技研の事業は、都内の中小企業への技術支援が主目的です。新本部の体制強化を機に、情報・電子・材料・環境・デザイン・繊維など幅広い分野の技術相談（無料）をはじめ、①注文を受けて試験・測定・分析を行う「依頼試験」、②企業自身が機器を使って製品・材料等を試験・測定・分析する「機器利用」、③技術課題の解決や共同で製品開発を行う「研究開発」、④個別ニーズに対応して技術開発支援する「オーダーメイド事業」さらには人材育成、産学公連携などの支援メニューが用意されています。

都産技研の山本克美・経営企画部長は「中小企業の技術支援拠点としてのサポート体制は整いました。分散していた機能を集約しただけでなく、既存事業を



都産技研 山本経営企画部長

拡充し、技術革新に必要な新たな事業にも取り組み始めています。従来にも増して“お客様とともに歩む”をモットーに、企業と一緒に課題解決を図り、事業発展に役立ちたい」と施設の活用を呼び掛けていました。

#### ■目を見張る！実験室や研究開発室

「新本部見学ツアー」は、貸切バスで現地を訪れ、真新しい新本部の概要説明を受けた後、特別な見学コースを設定していただき、約10カ所の施設部門をじっくりと時間をかけて見て回りました。

スタートは5階にある講堂。そこから4階の「材料・機器分析室」を訪ね、脱臭・脱水装置やVOC分解処理法などの説明を受けました。



材料機器分析室で説明を聞く見学ツアー参加者

3階には、中小企業からの注目度の高い「システムデザインセンター」があり、デザイン開発室や創作実験ギャラリーの活動状況が示され、開発品を市場に売り出して“商品”に作り上げていく方策が解説されました。



明るい雰囲気システムデザインセンター

同じフロアの「製品開発支援ラボ」も企業ニーズの高い施設です。広いスペースを区分けして、産業用ロボットを導入した共同研究開発室のほか、機械系、電気系、化学系、IT系ラボが配置され、各分野のニーズに専門的に対応できる、との説明がありました。



ロボットを駆使した支援ラボ

2階では、「実証試験セクター」を見学しました。温度・衝撃試験、電子ビーム、金属材料、精密加工などの試験室が配置され、それらの最新の機器類は、企業自体が直接利用することも可能となっています。



さまざまな試験項目に対応する実証実験セクター

1階には、「高度分析開発セクター」を中心に大型設備、重量物機器が備えられており、そのうち、音響・残響室や人工の雷発生ができる高電圧実験室などを見学しました。



大型装置が立ち並ぶ高電圧実験室

## ■産学公金が連携してバックアップ

今回の見学ツアーは、荒川区と城北信用金庫が都産技研の協力を得て共催し、また東京商工会議所荒川支部と山形大学工学部荒川サテライトが後援し開催されました。区内企業の技術革新を応援して、経営革新を促進しようという狙いで、産学公金が連携したという経緯があります。

見学ツアーに同行した荒川区の石原久・産業経済部長は「産業界が苦境に直面している時こそ、次の時代に羽ばたく種を仕込むことが肝要です。新製品・新技術開発に向けて、公的機関の都産技研と 荒川区 石原産業経済部長 連携し、最新の試験設備を活用することはコスト面でも得策です。施設を利用した場合は、区の助成制度もあります」とのエールを送りました。



また、城北信用金庫の榎田康治・常務理事は「中小企業のパートナーという方針で技術支援に力を入れており、営業店ベースでもきめ細かく対応しています」と中小企業の取り組みを応援する姿勢です。



連載～その3～

# 牛山博文の！ 毛～ひと工夫！



MACCコーディネーター 牛山博文

MACCコーディネーターは、今年度新たに1名増員し4名体制となり、さらにきめ細かい企業支援を目指していきます。このコーナーでは、新コーディネーターの牛山博文氏による生産管理の事例やMACCコーディネーターとしての活動報告等を連載で皆さんにお伝えしていきます。

## 資材調達での交渉術

前号に引き続き技術ベンチャーでの話です。あるとき「研究開発に使う設備の価格交渉をしてほしい」と社長がやってきました。その設備は1台約1000万円、それを研究開発のために2台必要だと言うのです。「100万円でも200万円でも、なるべく安く仕入れてほしい」ということでした。

その研究開発はその会社にとって将来、有望な事業につながる重要なものです。さっそく開発を担当している取締役の話を知ると、どうしても手に入れないと研究開発が進まないとのことでした。さらに設備に関する情報をあれこれ調べてみると、市場が限定的でまだ用途開発中の設備であるという情報を得ました。

私は設備メーカーに電話をして、営業担当者に価格交渉ではなく、「設備を2台無料で提供して下さい」とお願いしたのです。営業担当者はおどろいて「いったい何を言っているのですか？そのような無茶なことは到底受けられないです」と仰います。ま、当然でしょうか・・・？

私は憤慨している様子の担当者に「是非、1度上司に相談してほしい」とだけお願いして電話を切りました。翌々日、その営業担当者から連絡がありました。彼からは開口一番「設備の件ですが、上司と相談しました。やはり差し上げることはできません。」と言われました。しかし続けて「差し上げられませんが、デモ機として貸し出すことはできます。」と言ってきました。貸し出しの期間は通常半年ですが、延長可能とのことでした。これで棚卸しの時に“預り証”さえ提出すれば長期間、研究開発活動ができることになりました。

もちろん何でもこのようにうまくいくとは限りま

せん。この場合、私が無償提供してもらえると踏んだ理由がちゃんとあるわけです。1つめは設備を提供している会社と別の製品で取引があること。2つめは設備を担当している営業責任者がベンチャー企業の事業内容を熟知し将来性を評価していたこと。3つめは設備の用途開発の可能性です。設備メーカーにとってはベンチャー企業の事業が成功すれば市場が確保されます。つまりWin-Winの関係ができています。設備メーカーにとってコスト積み上げ式のプライシングではあり得ない判断ですが、営業責任者はベンチャーの将来にかけた訳です。もちろんうまくいかなければ設備を引き上げることもできますので、ベンダーにとってもいい話だったわけです。

資材調達や設備投資の究極の理想は「会社にとってほしいものはタダでスグに手に入れる」です。金を払わなければ手に入らないと考えることを常識とすれば、非常識な行動ということになりますが、1度可能性を吟味するのは必要な事だと思います。ここでも“会社の強み”が重要なのは言うまでもありません。“技術力”、“技能力”、“営業力”、“ビジネスモデル”、“商品”、“オペレーションマネジメント”、一言で強みといってもいろいろありますね。自分の会社の“強み”は何かをまずは“棚卸し”して見ましょう。思いもよらぬ“強み”が発見できるかもしれません。





# MACCコーディネーター TOMMYの部屋 VOL.17

## 😊 「アラン幸福論（1）荒川物語」 😊

MACCシニアコーディネーター 豊泉光男

もう今年も残すところ数える程になってきました。本年は、未曾有の東日本大震災が東北関東地方のみならず、日本全体に大きなダメージをもたらしました。被災は、住宅・学校・工場に留まらず大切な家族や友人にまで及びました。被災地支援に関しては、MACC企業の皆様からも、多くのご支援をいただき誠にありがとうございました。MACCの目差す“顔の見えるネットワーク”が今回、東北地方まで届いたことは、シニアコーディネーターとしても大きな喜びです。被災地の復活にはまだ多くの時間を要しますが、年の瀬の厳しい寒さの中、少しずつ元気な便りが届くようになったことは、喜ばしいことです。

今回の大災害は、甚大な被害を全国にもたらすと同時に、多くの警鐘を私たちに与えたと言えます。災害対策とは、放射能についての知見の必要性、家族愛の気づき、そして、幸福について深く考えることです。国民幸福度に関しては、GDP偏重に変わって、研究は、イギリス・レスター大学（国民幸福度・世界ランキング）やブータンGNH（国民総幸福量）や日本・内閣府（国民幸福度）に加えて荒川区・GAH（荒川区民総幸福度）などで研究が開始されています。それを受けて今回は「アランの幸福論」について、考えてみます。三大幸福論として有名なのは「ヒルティ幸福論・1891年」「アラン幸福論・1925年」「ラッセル幸福論・1930年」です。

著者のアランは、本名：エミール・シャルチエ（1868～1951年）仏・ノルマンディー生まれ、その当時のフランスは、19世紀末第二次産業革命の恩恵を受け、普仏戦争の勝利で広大な植民地を獲得し繁栄しました。一方、貴族、資本家にその富が集中し、小作人・労働者・女性などとの



貧富の格差・差別が拡大しました。当時は二度の大きな帝国主義戦争、ロシア革命さらに1929年のアメリカ発の世界金融恐慌と激動の時期でした。アランはパリのミシュレ高等学校で哲学の教師ジュール・ラニョーと出会い師事し、特にプラトン、スピノザについて学びました。その後、師範学校を24歳で卒業し、フランス各地の高校の教師を勤めました。1903（35歳）年にはルーアン新聞に「プロポ（コラム）」を寄稿し、それが後の「アランの幸福論」として、出版されるきっかけになりました。1909年（41歳）にはパリの名門アンリ四世高校に移り、65歳で引退しましたが、その後も執筆活動続け、83歳で生涯を閉じました。

### \* アランの幸福論と企業経営について

アランの幸福論は実は、幸福についてではなく、不幸について、多く論じています。そこに登場するのは、躁鬱患者、アルコール依存症、神経症、不眠症、トラウマを持つなど、自分が不幸だと思っている人達です。アランは幸福論の中で「不幸になったり、不満を覚えたりするのはたやすい。ただじっと座っていればいいのだ。人が自分を楽しませてくれるのを待っている王子のように」と述べています。

人が楽しませてくれる「幸福」を待っている。実は、「幸福」は自分から行動して、初めて得られるものとアランは言っています。じっとしていることは、すなわち不幸になることと言っています。同様に成功した企業経営者で「私は、運が良かったんですよ。何も、特別優秀だなんてことは、考えたこともありません。」と言い切る人に多く会ってきました。この人達に共通する運の良さについて、考えてみました。幸運と言う小舟は、誰の前にも、流れてきます。しかし、目の前に来た時、気がついて、飛び乗ろうとしても、もう間に合いません。慌てて飛び乗ってもバランスを崩して、小舟ごとひっくり



返ってしまいます。無事に飛び乗るには、流れてくる小舟を事前に発見し、タイミングの良いジャンプを準備・練習して、初めてうまく乗船できるのです。「幸運の女神には前髪しかない」とも言われます。幸運は、誰にも同じように到来するのですが、じっと待っているだけでは、手に入らないのです。事前の準備行動（情報取得・繰り返しの訓練）が必要です。経営は、実践学と言えます。どんなに沢山学び、研究しても、自分自身の実践には、到底

及びません。アランの幸福論もまた、観念論の哲学ではなく実際の行動を重視している点は、企業経営と似ているといえますね。アランの幸福論の続きについては、又次回お話したいと思います。寒さ厳しき折、ご自愛いただき、良い年をお迎え下さい。



## MACCグローバルビジネス研究会キックオフセミナーのお知らせ

MACCプロジェクトでは、国内市場の縮小など経営環境の変化に対応するため、区内中小企業等がアジアを中心として成長する国際市場を取り込み、グローバル企業を目指す「MACCグローバルビジネス研究会」の立ち上げを検討しております。

本研究会に先立ち、中小企業のグローバル戦略をテーマに、既に海外展開している区内企業の経営者による講演とパネルディスカッション及び交流会を行います。

自社の海外展開に関心のある皆様のご参加を心よりお待ちしております。

【開催日時】 平成24年2月16日（木）15:20～17:20(交流会：17:30～19:00)

【テーマ】 「中小モノづくり企業のグローバル戦略とは？ ～自社の戦略を考えよう～」

【会場】 荒川区産業経済部4階研修室A(交流会は、荒川区役所地下1階 レストラン さくら)

【内容】 基調講演「区内モノづくり企業の実例から学ぶグローバル戦略」

講師：オリエンタルエンジニアリング(株) 代表取締役社長 木村良三氏

パネルディスカッション「グローバル戦略の成功ポイントとは、阻害要因とは」

パネリスト：オリエンタルエンジニアリング(株) 代表取締役社長 木村良三氏

(株) ス ト ロ ン グ 代表取締役 平岩 隆宏氏

吉 村 織 維 (株) 代表取締役 吉村 功氏

ファシリテーター：MACCシニアコーディネーター 豊泉光男

【対象】 グローバル事業展開に関心のある企業

【定員】 30人（申込み順）

【締切】 平成24年2月10日（金）

【費用】 無 料（交流会参加の方は2,000円）

【その他】 申込み・お問合せは、荒川区産業経済部経営支援課

☎ (3803)2311 FAX (3803)2333

電子メールアドレス [macc@city.arakawa.tokyo.jp](mailto:macc@city.arakawa.tokyo.jp)



産業振興シンボルキャラクター  
「わざ丸」

### <発行>

荒川区産業経済部経営支援課産業活性化係 MACCプロジェクト事務局

〒116-0002

東京都荒川区荒川2-1-5 セントラル荒川ビル3階

TEL:03-3803-2311 FAX:03-3803-2333 E-mail:macc@city.arakawa.tokyo.jp

URL:<http://sangyo.city.arakawa.tokyo.jp/macc/>